

かやのき 栢ノ木遺跡 第13次調査

調査場所 綴喜郡井手町栢ノ木
調査期間 令和2年12月下旬～令和3年4月末(予定)
調査機関 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査地全景（北から）

【はじめに】

栢ノ木遺跡は、綴喜郡井手町の西部、木津川の支流である玉川右岸の段丘上に立地しています。周辺には、井手寺に瓦を供給した岡田池瓦窯跡や大安寺(奈良市)に瓦を供給した石橋瓦窯跡群など、奈良時代の瓦窯跡が分布しています(第1図)。また、『続日本紀』に記載される橘諸兄^{たちばなのもろえ}の別荘である「相楽別業」^{さがらべつごう}や聖武天皇^{せいぶてんこう}が行幸の際に滞在した「玉井頓宮」^{たまいどんぐう}もこの地域にあったと推定されています。

調査地は、奈良時代から平安時代にかけて存続した井手寺跡の寺域東限に隣接しています。今回の調査は、井手町新庁舎等整備事業に伴い、井手町の依頼を受けて実施しました。

【調査の概要】

今回の調査は、井手町教育委員会の試掘調査の結果をうけ、本発掘調査が必要と判断された範囲500㎡を調査しました。その結果、調査区東南部で建物基壇跡と基壇に伴う階段、雨落ち溝、石敷などが見つかりました(第2図)。

基壇の平面形は、ほぼ正方形に復元され、東西約15.3m、南北約15.1m、残存高0.7mを測ります。基壇外装は自然石や割石を用いた乱石積基壇^{らんせきつみきだん}で、地覆石^{じふくいし}の上に基壇化粧として大型の自然石を用いていました。基壇の上面は、開墾等によって削平されており、礎石などは確認できませんでした。ただ、基壇のほぼ中央で銭貨が17枚出土しており、鎮壇具^{ちんだんぐ}と考えられます。基壇は、質の異なる土が交互に積み重ねられていることから、版築^{はんちく}によって築成されたと判断されます(写真1)。

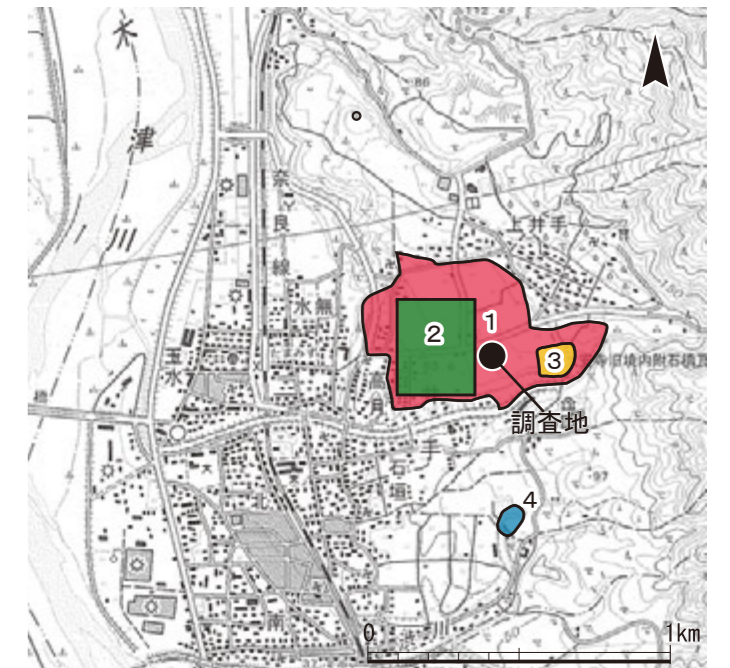
階段は基壇の北辺と西辺の2か所で検出しました。北辺は階段の耳石とともに4段を検出し、幅3.0m(10尺)、残存長1.6m、残存高0.5mを測ります(写真2)。西辺の階段は削平されていたため、基底のみ残存していました。

石組の雨落ち溝は、幅0.4～0.45mを測ります。また、基壇の外周約1.5mの範囲に自然石や割石を用いた石敷きが丁寧に構築されていました(写真3)。

基壇跡の周囲からは大量の軒平・軒丸瓦、平・丸瓦が出土しました。また、鬼瓦^{きゆうたるとるき}、施釉垂木先瓦^{せゆうたるとるき}、土師器^{はじき}、須恵器^{すえき}、灰釉陶器^{かいゆうとうき}、鉛釉陶器^{えんゆうとうき}、鉄釘、金銅製の風招^{ふうしょう}など多彩な遺物も出土しました。

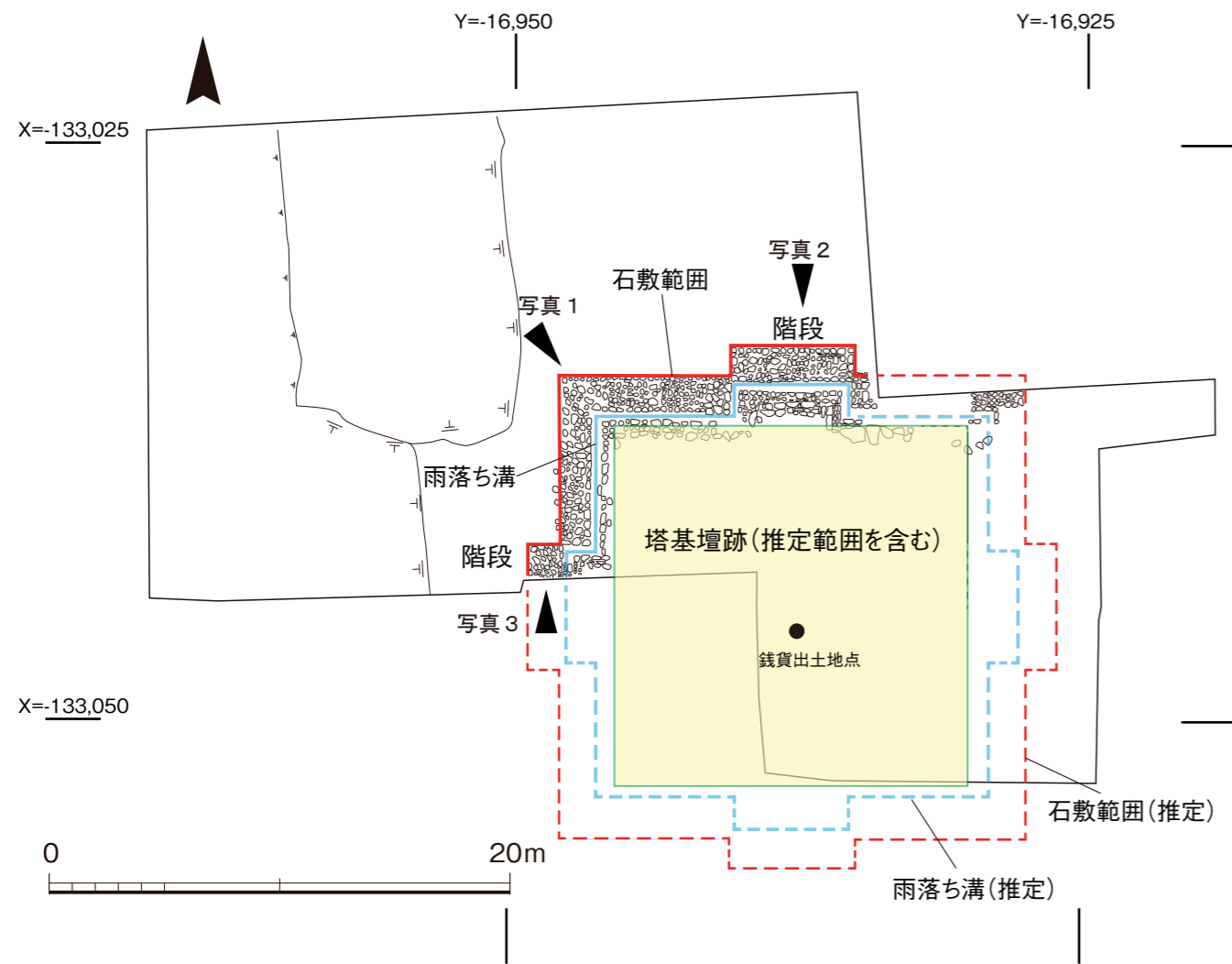
【まとめ】

今回の調査で見つかった基壇跡は、15.3m(51尺)四方のほぼ正方形に復元でき、北側と西側の2か所に階段が位置することから、塔の基壇跡と考えられます。現存する薬師寺(奈良市)、山城国分寺(木津川市)などの奈良時代の塔基壇の規模と比較すると、七重塔基壇は一辺が約17m～20mであることから、五重塔と想定されます(第3図)。出土した瓦は井手寺跡と共通するものが多いことから、この基壇跡は、井手寺に伴う塔跡であると判断されます。



1. 栢ノ木遺跡 2. 井手寺跡 3. 石橋瓦窯跡群 4. 岡田池瓦窯跡
第1図 調査地と周辺の主な遺跡(1/25,000)





第2図 調査区遺構配置図

出土した瓦から、塔は奈良時代後半から平安時代前期に建立されたと考えられます。塔は主要伽藍の創建からやや遅れて、建立されたと想定されます。その後、平安時代中期には塔の修理が行われたと考えられます。

基壇に使用された石材や出土遺物には被熱した痕跡はないため、塔は火災ではなく、老朽化に伴い倒壊したと推測されます。出土した土器から、鎌倉時代に廃絶したと考えられます。

井手寺は、奈良時代中頃に政権の中樞を担った橘氏によって創建されたと考えられています。これまでの発掘調査では、約241.2m(810尺)四方におよぶ広大な寺域が復元されていますが、寺院の中心である主要伽藍の配置は明らかになっていませんでした。塔は他の主要伽藍とは別の区画を設けて、寺城南東に塔院を形成していたと推定されます。

井手寺跡の主要伽藍の一つである塔跡を確認できたことは、井手寺の実態に迫る大きな成果といえます。荘厳華麗に装飾された塔が、井手寺と橘氏の権力のシンボルとして高くそびえ立っていたと考えられます。また、地方寺院において塔院を形成するのは稀な事例であり、塔院の区画を含めると、井手寺の寺域はさらに大規模なものであった可能性もあります。このように、井手寺の創建は、当時の橘氏の権勢を示す、国家規模の一大事業であったと考えられます。古代における地方寺院の実像を明らかにする重要な成果となります。

最後になりましたが、発掘調査に参加いただいた皆様、ご指導、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。



写真1 塔基壇跡全景(北西から)

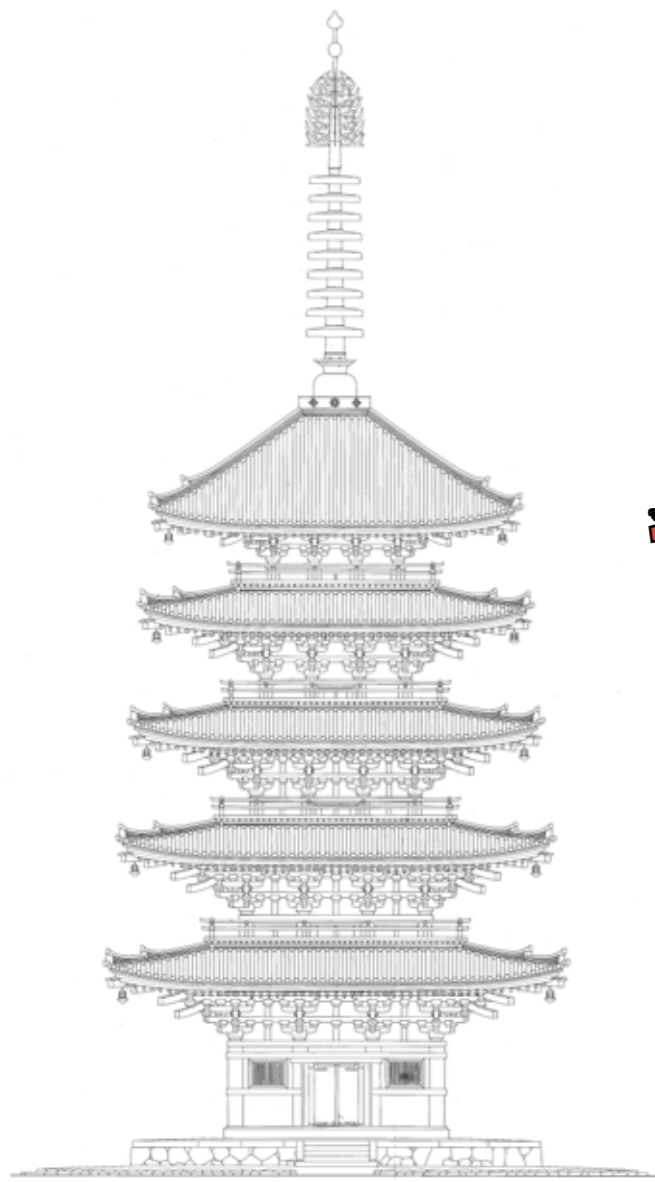


写真2 塔基壇跡北辺階段(北から)

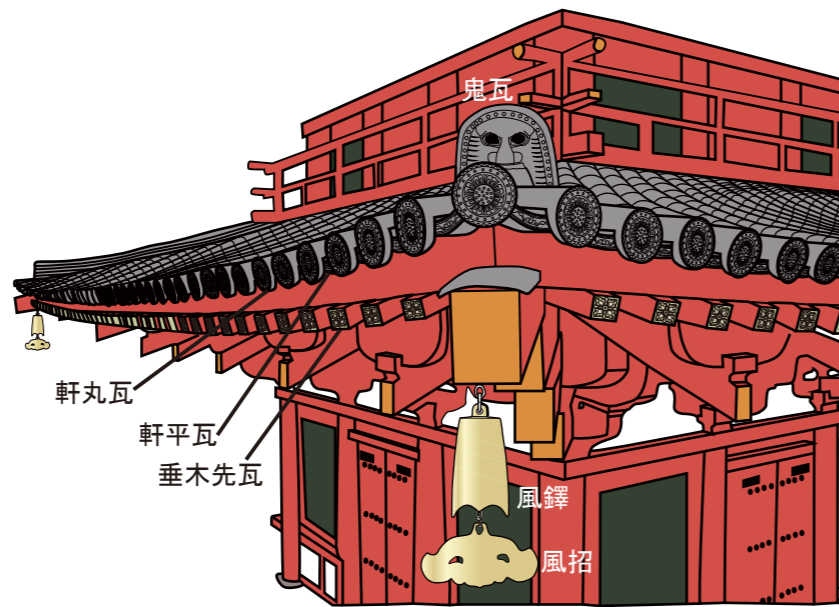


写真3 雨落ち溝(南から)

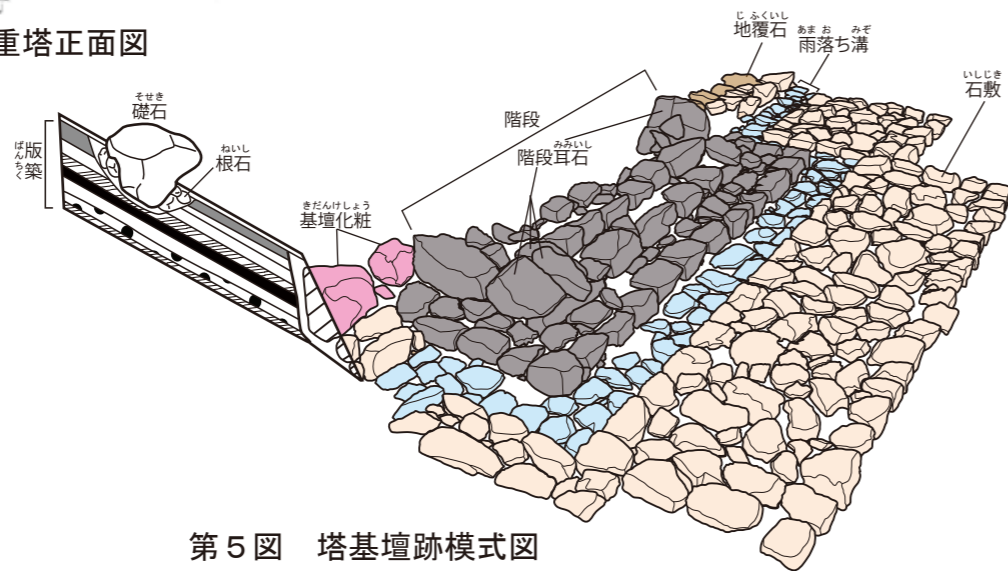




第3図 醍醐寺五重塔正面図



第4図 出土遺物の使用箇所模式図



第5図 塔基壇跡模式図

用語説明

伽藍…寺院の主要建物群の総称

塔…本来は卒塔婆と言う。釈迦の遺骨である仏舎利を納め礼拝を行う建物のこと。

基壇…周囲より高くした建物の土壇。防湿のほか、建物の荘厳化、地盤固めとしての機能がある。

地覆…地面に据える基礎部分の石。

版築…土質が違う土や砂を交互に入れ、薄く何層にも積み上げて突き固める工法。

雨落ち溝…建物の周囲を巡る排水のための溝。



(1) 軒丸瓦

塔の創建期の瓦です。
平城宮と同じ文様の瓦です。



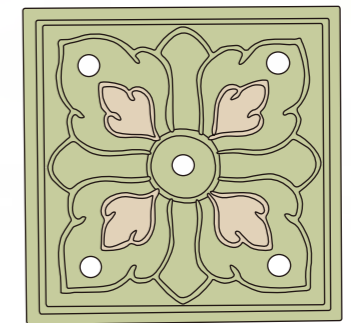
(5) 鬼瓦

塔の屋根を飾った鬼瓦です。



(2) 軒丸・平瓦

軒丸瓦には蓮華の花の文様、
軒平瓦には唐草の文様が使われています。



復元図

(6) 施釉垂木先瓦

緑色と白色の釉薬が塗られた瓦です。



(3) 軒平瓦

高麗寺(木津川市)と同じ文様の瓦です。
塔の補修に使用されたと考えられます。



(4) 軒平瓦

平安宮と同じ文様の瓦です。京都市北部で作られました。
中心には製作所を示す「栗」という字があります。



(7) 風招

風鐸の風受けの金銅製の風招です。

塔基壇跡周辺出土の主な遺物



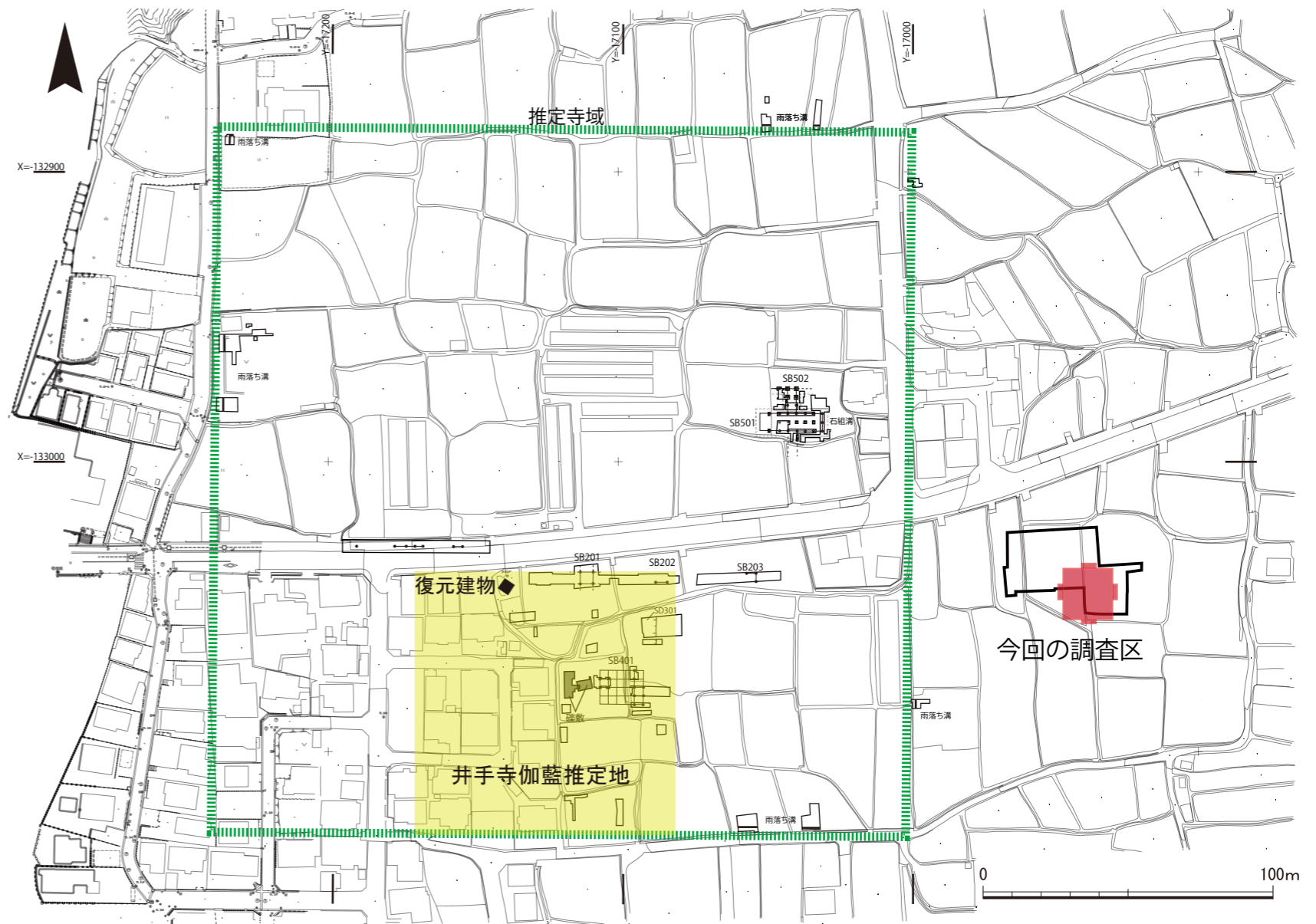
寺塔名	所在地	塔身規模(柱間寸法) (尺)	基壇			塔建築	創建年代
			規模	基壇外装	版築		
薬師寺東塔	奈良県奈良市	23.4(7.83 7.74 7.83)+四周裳階	東西13.3m 南北13.4m	切石積	あり	三重塔	奈良
薬師寺西塔	奈良県奈良市	24.2(8.1 8 8.1)	13.7m	切石積	あり	三重塔	奈良
元興寺	奈良県奈良市	33(10.7 11.6 10.7)	17.7m	乱石積 (現状)	不明	不明	奈良
東大寺東塔	奈良県奈良市	52(10 10 12 10 10) ※推定	24.2m	壇正積	あり	七重塔	奈良
東大寺西塔	奈良県奈良市	不明	23.8m	壇正積	不明	七重塔	奈良
西大寺東塔	奈良県奈良市	28(9 10 9)	17m	野面石積 (現状、近代)	あり	七重塔	奈良
西大寺西塔	奈良県奈良市	28(9 10 9)	17m	野面石積 (現状、近代)	あり	七重塔	奈良
大安寺東塔	奈良県奈良市	40(13 14 13)	21m(延石外縁間)	壇正積	あり	七重塔	奈良
大安寺西塔	奈良県奈良市	40(13 14 13)	21m(延石外縁間)	壇正積	あり	七重塔	奈良
由義寺	大阪府八尾市	不明	約20m	切石積あるいは 壇正積	あり	七重塔	奈良
山城国分寺	京都府木津川市	32(10.25 11.5 10.25)	17m	瓦積	不明	七重塔	奈良
高麗寺	京都府木津川市	不明	12.7m	瓦積	あり	五重塔	飛鳥
神雄寺	京都府木津川市	6(方1間)	不明	不明	不明	多重塔	奈良
平川廃寺	京都府城陽市	36(12×3)	17.2m	瓦積	あり	五重塔	奈良
久世廃寺	京都府城陽市	21(7×3)	推定13m	瓦積	あり	三重塔	奈良
西山廃寺	京都府八幡市	18(4.5 9 4.5)	不明	瓦積	不明	不明	平安
井手寺	京都府井手町	不明	15.3m	乱石積	あり	五重塔	奈良

※箱崎和久2012「古代寺院の塔遺構」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所を元に作成

表1 主な塔跡の規模

西暦	年次	主な出来事	橘氏関連の出来事	井手寺の建物
684	天武13		橘諸兄誕生 県犬養三千代、橘姓を賜る。	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="width: 10px; height: 10px; background-color: #ccc; margin-bottom: 5px;"></div> 井手寺創建 </div> <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center; margin-top: 10px;"> <div style="width: 10px; height: 10px; background-color: #ccc; margin-bottom: 5px;"></div> 塔創建 </div> <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center; margin-top: 10px;"> <div style="width: 10px; height: 10px; background-color: #ccc; margin-bottom: 5px;"></div> 塔修理 </div>
710	和銅3	平城京遷都		
729	天平元	長屋王の変		
740	天平12	聖武天皇が相楽別業に行幸 藤原広嗣の乱 聖武天皇が玉井頓宮に行幸		
		恭仁京遷都		
741	天平13	国分寺・国分尼寺建立の詔		
743	天平15	壘田永年私財法 大仏造立の詔	橘諸兄左大臣となる	
745	天平17	平城京遷都		
757	天平宝字元		橘諸兄没	
		橘奈良麻呂の変		
784	延暦3	長岡京遷都		
794	延暦13	平安京遷都		
815	弘仁6		橘嘉智子が嵯峨天皇の皇后となる	
844	承和11		橘氏公右大臣となる	
1026	万壽3		井手寺荒廃する。	

表2 橘氏関連年表



第6図 井手寺跡寺域復元図と今回の調査区

井手寺と橘氏

井手寺跡では水田の開墾に伴い、礎石や瓦が出土することから、古代寺院の存在が早くから知られていました。これまでの井手寺跡の発掘調査では、礎石建物6棟、掘立柱建物1棟、石組の雨落ち溝や石敷などがみつっていますが、金堂や食堂などの伽藍配置については未解明です。

井手寺の造宮氏族や創建時期などは同時期の文献資料に記載はありませんが、『伊呂波字類抄』に、井手寺に橘氏の氏神である梅宮神社の末社が祀られていることが記載されていることから、橘氏が造宮氏族だったと考えられています。また、奈良時代には、「井手左大臣」と号した橘諸兄、平安時代には、「井手右大臣」と称された橘氏公など、「井手」という通称が使われている例もあります。このように、井手寺は橘氏の氏寺として創建され、隆盛を極めていたと考えられます。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

